

令和8年3月23日
道路局国道・技術課

「路面下空洞に強い道路構造技術」、「路面下のより深い位置の空洞や
陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術」に関する公募について
～新技術による道路陥没の被害軽減を目指して～

道路排水施設や下水道などの地下埋設物を起因とする道路陥没への対応は喫緊の課題となっており、路面下の空洞に対して脆性的な破壊を防ぐ技術や路面下の空洞や陥没リスク箇所を検知する技術などが求められています。

このような背景から、道路陥没による被害を軽減する調査及び施工などの新たな技術を公募します。

1. 公募期間: 令和8年3月23日(月)～令和8年5月22日(金)
 2. 公募要領及び応募資料作成要領:
下記ホームページより、公募要領及び応募資料作成要領をダウンロードできます。
 - ① 「路面下空洞に強い道路構造技術」
<https://www.jice.or.jp/roadtech/uc-rs>
 - ② 「路面下のより深い位置の空洞や陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術」
<https://www.actec.or.jp/douro-kt-romenka/>
 3. 公募に関する問い合わせ:
 - ① 「路面下空洞に強い道路構造技術」
一般財団法人 国土技術研究センター 道路政策グループ
路面下空洞に強い道路構造技術担当
TEL: 03-4519-5002 E-mail: uc-rs@jice.or.jp
 - ② 「路面下のより深い位置の空洞や陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術」
一般財団法人 先端建設技術センター NETISグループ 事務局
TEL: 03-3942-3992 E-mail: douro-romenka@actec.or.jp
- ※「一般財団法人 国土技術研究センター」、「一般財団法人 先端建設技術センター」は道路技術懇談会を経て導入促進期間として選定されている機関です。

【問合せ先】

- ① 「路面下空洞に強い道路構造技術」
道路局 国道・技術課 道路メンテナンス企画室 課長補佐 三好(みよし)
代表: 03-5253-8111(内線 37892)、直通: 03-5253-8494
- ② 「路面下のより深い位置の空洞や陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術」
道路局 国道・技術課 道路メンテナンス企画室 課長補佐 小野寺(おのでら)
代表: 03-5253-8111(内線 37852)、直通: 03-5253-8494



「路面下空洞に強い道路構造技術」に関する公募について

○道路排水施設や下水道などの地下埋設物を起因とする道路陥没への対応は喫緊の課題となっており、陥没の原因となる路面下空洞に対して、効果のある道路構造技術が求められています。このような背景から、脆性的な破壊を防ぎ、陥没に至る前に変状等が確認できる技術を公募します。

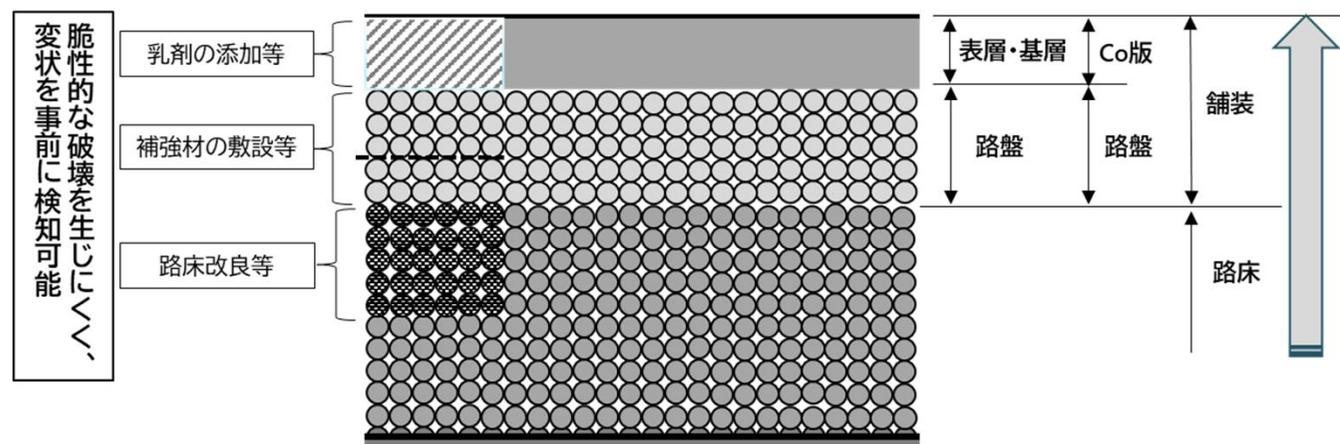
公募する技術

『路面下空洞に強い道路構造技術』

- 従来の舗装に比べて路面下空洞発生時に脆性的破壊を生じにくく、変状を事前に検知が可能であること。
- 道路や占用物件の維持管理について過大な影響を及ぼさないこと。
- 路面下空洞調査への影響が少ないこと。
- 修繕及び占用工事時にリサイクルへの配慮が可能であること。

■求める道路構造技術

<公募技術のイメージ>



「路面下のより深い空洞の位置や陥没リスク箇所を探索・検知できる技術」に関する公募について

○現在の探査車による路面下空洞調査では、調査地点における1.5～2.0m程度までの深さの空洞検知が可能であるが、昨今の道路陥没事故を踏まえれば、より深い位置の空洞を探索・検知できる技術や、モニタリングによる陥没発生リスク箇所の探索・検知技術が求められています。このような背景から、路面下のより深い空洞の位置や陥没リスク箇所を探索・検知できる技術を公募します。

公募する技術

『路面下のより深い空洞の位置を探索・検知できる技術』

- 2mを超える深さにある空洞の位置(平面および鉛直位置)を物理探査技術やセンシング技術を用いて探索・検知できる技術
- 探索・検知(事前準備作業含む)にあたり、交通、道路、占用物に過大な影響を及ぼさない技術
- 既に実用化されており現場での活用促進が望まれる技術(実用化されているものの利活用がない、または少ない技術(新技術)も含む)

『モニタリングにより陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術』

- SAR衛星やセンシング技術等により、広範囲を対象とした地表面もしくは地中の変状をモニタリングすることで、陥没発生リスク箇所を探索・検知できる技術
- モニタリング(事前準備作業含む)にあたり、交通、道路、占用物に過大な影響を及ぼさない技術
- 既に実用化されており現場での活用促進が望まれる技術(実用化されているものの利活用がない、または少ない技術(新技術)も含む)

